

農林漁業体験(海外レビュー論文)に関するエビデンステーブル(研究結果の一覧)

番号	著者 (発行年)	研究方法 研究デザイン/検索月・ データベース・検索式・ 検索語など	採択基準	農林漁業体験 の内容	アウトカム指標 (利点、重要性 に関する調査 項目)	結果 利点、重要性に関する 調査結果 [文献番号]	キーワード
1	Dieneke Schram- Bijkerk、 et al. (2018)	ナラティブレビュー /2014年6月に検索 データベース: Scopus、 Medline、Psycinfo、 Embase、Google Scholar 検索語: allotment gardening、urban agriculture、urban gardening、social cohesion、lifestyle、 obesity、stress、 general health、 perceived health、 poverty、physical activity、food consumption、 violence、well-being、な ど。 (2016年に博士論文一 件を追加。2017年6月に urban gardening、 health、のキーワードを 用いて追加検索。)	・アーバンガーデニン グに関する論文 ・ヨーロッパ(ロシア 含む)もしくはアメリカ にフォーカス ・オリジナルのデータ を含む ・間接的に健康に影 響する要因の記載が ある ・特定のワークショッ プや教育プログラム を評価したものは除く ・1999年以降に出版 されたもの ・一般的な集団を対 象としている(健康状 態の悪い者や少数民 族を対象とした論文 は含まれない)	アーバンガー デニング(都市 環境での、ま たは都市環境 に関連した、あ らゆる非営利 的な食糧生 産)	間接的に健康 (身体的、精神 的、社会的健 康)に影響する 要因	採択論文20件 [1-20] ・身体活動(4件 [1-4])、うち量的研究2件 [1、2]、質的研究2件 [3、4]) ガーデナーは非ガーデナーと比較して身体活動レベルが高い [1]が、他の活動 グループ(e.g. ウォーキンググループ)に従事している者と比較するとそうではない [2]. ・野菜果物の消費(9件 [4、5、6、7 など]、うち質的研究5件、量的研究3件、量的・ 質的両方1件) ガーデナーは非ガーデナーと比べて野菜・果物摂取が多く、推奨量を満たしてい る者も多い [5]. インタビュー調査では、新鮮な食料品へのアクセスがガーデニング に参加する最も一般的な理由の1つであった。また、コスト節減[4]と野菜の種類の 増加[6]が指摘された。ほとんどの若者とその親は、収穫した作物を食べることに関 心を示した [7]. ・リラクゼーションと回復(5件 [4、8 など]、うち質的研究2件、量的研究3件) ガーデニングと読書との比較では、その前後でどちらもストレスホルモン値が減 少したがガーデニングの方が有意に減少が大きかった [8]. ・個人レベルの社会的関係(5件 [9、10 など]) ガーデナーは共通してアーバンガーデニングの社会的側面を強調した [9].しか し、社会的関係やソーシャルサポート有意な上昇を示す研究はなかった。一つの研 究では、ガーデンへの参加と社会的関与との有意な正の関連が見られた [10]. ・コミュニティの社会的凝集性(7件 [3、4、11、12、13、14、他1件]、質的研究) 一般的にアーバンガーデンは、人々の関係を改善し、コミュニティの誇りを高める ことによって、コミュニティ全体に利益をもたらす場所とみなされている [3、4、11、 12、13].しかし、社会的影響が必ずしもすべて有益であるとは限らない(e.g. 異文化 の排除) [13、14]. ・暴力の減少(2件 [3、15]) 全体として、アーバンガーデンのある区域と無作為に選ばれた区域との間に犯罪 数の差はなかった。しかし、インタビューでは、アーバンガーデンの利用者とその地 区の住民がより安全な地域であることを認識していることが示された [15].	ライフスタイ ル コミュニティ の健康 指標 生態系サー ビス 都市土壌 ガーデニン グ

番号	著者 (発行年)	研究方法 研究デザイン/検索月・ データベース・検索式・ 検索語など	採択基準	農林漁業体験 の内容	アウトカム指標 (利点、重要性 に関する調査 項目)	結果 利点、重要性に関する 調査結果 [文献番号]	キーワード
2	Mariana T Garcia, et al.(2018)	システマティックレ ビュー/2016年1～2月 に検索 データベース: PubMed、LILACS、 ERIC、Embase、Web of Science 検索式: サプリメントファ イルとしてすべて公開	・2005年から2015年 の間に英語、スペイ ン語またはポルトガ ル語で査読のある学 術誌に原著として掲 載された研究 ・他の年齢層が関与 しているかどうかにか かわらず、対象集 団に都市部に住む成 人を含む ・アーバンガーデンへ の参加を研究対象と している ・ヘルスプロモーショ ンおよび食糧安全保 障の文脈で食品関連 のアウトカムを評価 または報告している	アーバンガー デニング(都市 部の家庭菜園 やコミュニ ティーガーデ ン)	食物・栄養関 連の指標(健 康的な食生 活、健康的な 食物へのアク セス、健康的 な食物への信 念・知識・態 度)	採択論文12件 [1-12].(介入研究の前後比較(対照群なし)3件 [1-3]、介入研究の 質的評価1件 [6]、横断研究7件 [4、5、7-10、12](うち量的研究3件 [8、10、12]、質 的研究4件 [4、5、7、9])、コホート研究1件 [11].国: オーストラリア1件 [5]、ニュー ジーランド1件 [11]、コロンビア1件 [3]、南アフリカ1件 [9]、カナダ1件 [7]、アメリカ7 件 [1、2、4、6、8、10、12].研究の質の評価(COREQや米国立衛生研究所の評価 指標を使用): strong5件 [1、2、4、5、6]、moderate5件 [7-11]、weak2件 [3、12]. ※[1]は糖尿病患者、[2]と[6]はがん患者が対象) ・健康的な食生活 野菜果物摂取量や種類の増加7件 [2、4、6、7、8、10、12]、健康的な食生活2件 [2、6]、家族の栄養改善2件 [2、7]、の報告あり. ・健康的な食物へのアクセス 健康的な食物へのアクセスの向上7件[1、3、4、5、7、9、11]、作物を分け合うこと 6件[4、5、7、9、11、12]、コスト節減3件[5、7、11]、の報告あり. ・健康的な食物への信念・知識・態度 料理や食事計画への興味の上昇4件 [1、6、7、12]、健康的な食事の重要性の知 識4件 [2、3、6、7]、新鮮な無農薬野菜の生産や消費4件 [3、5、7、11]、文化的な ルーツとのつながりの強化2件 [4、7]、の報告あり.	ガーデニン グ 成人 年齢 食習慣 健康態度

番号	著者 (発行年)	研究方法 研究デザイン/検索月・ データベース・検索式・ 検索語など	採択基準	農林漁業体験 の内容	アウトカム指標 (利点、重要性 に関する調査 項目)	結果 利点、重要性に関する 調査結果 [文献番号]	キーワード
3	W. K. Al-Delaimy, et al. (2017)	ナラティブレビュー/記 載なし	明確な記載なし(先 進国と開発途上国に おけるコミュニティ ガーデンの健康への 利益またはリスクと の関連を報告してい る論文)	コミュニティ ガーデン	健康への利益 またはリスク	採択論文35件 [1-35] ※コミュニティガーデンと健康との関連の報告以外も含む ・野菜果物摂取 コミュニティガーデンへの参加と野菜果物摂取との正の関連が報告されている [3、5、6、18、28]。しかし、定量的な評価を行った介入研究はなかった。 ・身体活動 コミュニティガーデンへの参加と身体活動との関連は報告されているが、定量 的な研究はない [17、29]。 ・身体的影響 コミュニティガーデンへの参加は、身体的健康状態[26]、体重管理[34]、HbA1c値 [31]、への良い影響が報告されている。 ・子供の研究 体重管理[7、13]、野菜果物摂取への態度 [13、35]、注意機能や認知機能 [9]、 への良い影響が報告されている。 ・食糧安全保障 災害時の食料安全保障として有効[33]。開発途上国の食料安全保障としては、 ガーデニングへの偏見も報告されており[21]、効果があった事例もあるが[11]、効 果が少ないという報告もある[25]。先進国では、健康的な食事への態度や嗜好が改 善した報告[13]、成功しなかった介入の報告[30]、コミュニティガーデンの管理方法 による比較をした報告[10]、参加する時間が十分にとれず効果的ではなさそうだ という報告[19]がある。 ・エンパワーメント 作物の販売により収入を得ることで、女性のエンパワーメントを促す[14、30]。コ ミュニティーのエンパワーメントにも有効[1]。しかし、男性に受け入れられがたい側 面もある[30、31]。 ・社会的凝集性 住民参加や誇りと関連する[4、27、29、35]。社会的凝集性や所属感覚と関連する [14、15、24]。 ・健康へのリスク 都市部での土壌汚染や水質汚染の問題が懸念されているが、その対策も考えら れている。	コミュニティ ガーデン 土壌汚染 環境 開発途上 国 都市 慢性疾患 栄養

番号	著者 (発行年)	研究方法 研究デザイン/検索月・ データベース・検索式・ 検索語など	採択基準	農林漁業体験 の内容	アウトカム指標 (利点、重要性 に関する調査 項目)	結果 利点、重要性に関する 調査結果 [文献番号]	キーワード
4	Mateja R. Savoie-Roskos, et al. (2017)	システマティックレビュー/ データベース: PubMed、Web of Science、The Cumulative Index to Nursing and Allied Health Literature、Scopus. 検索語: youth、children、child、gardening、fruit and vegetable、fruit、vegetable、nutrition、school、consumption、intervention. 検索式: Table1にすべて公開されている。 (参考文献リストから4件追加.)	・2005年1月1日～2015年10月31日の間に英語で出版 ・先進国で実施 ・ガーデニングによる介入を扱っている ・2～18歳が対象 ・野菜果物摂取を測定	ガーデンを拠点とした介入(屋外の庭、小規模農園、コンテナ菜園、その他、による野菜果物の定植、栽培、収穫の体験)	野菜果物摂取	採択件数14件 [1-14]。国: アメリカ10件 [1-10]、イギリス2件 [11、12]、オーストラリア1件 [13]、カナダ1件 [14]。多くが小学生を対象とした研究 [1、2、5-14]。介入期間は10週間から18か月。学校での実施9件 [6-14]、その他は地域や保育園で実施5件 [1-5]。対照群のある研究10件 [1-3、6-9、11-13]、うちランダムサンプリング3件 [2、3、11]。野菜果物摂取は、量・頻度・種類を指標としている。研究の質の評価(The Effective Public Health Practice Project Quality Assessment Toolを使用): strong1件 [2]、moderate1件 [12]、weak12件 [1、3-11、13、14]。 ・野菜果物摂取 ランダム化比較試験 [2、3、11] で、統計的に有意な野菜果物摂取量の変化が見られた報告はなかった。増加していたが有意差検定を行っていない報告 [3]、増加傾向が見られたが有意ではない報告 [11]、野菜果物摂取量に有意な変化はなかったが食物繊維摂取量が有意に増加した報告 [2]、があった。 非ランダム化比較試験 6件 [6-8、10、12、13] のうち、4件 [6、8、10、12] で野菜または果物摂取の増加が報告された。2件 [7、13] では有意な増加は報告されなかった。 前後比較試験 [1、4、5] のうち、2件 [4、5] では統計的に有意な野菜果物摂取の増加を報告。1件 [1] では有意な増加は報告されなかった。 前向きコホート研究 [9、14] のうち、1件 [14] では野菜果物摂取の有意な変化はなかった。1件 [9] では有意な増加が報告された。	野菜・果物 ガーデニング 若者 子供 政策システムと環境
5	Angie Vasquez, et al. (2017)	ナラティブレビュー/ データベース: PubMed、Web of Science、Google Scholar、Agricola (採択された文献の参考文献リストからも追加) 検索語: community supported agriculture、CSA、local foods、household food environment、dietary interventions、health promotion	・アメリカで実施 ・過去10年間で実施されたもの、ただし頻繁に引用されている古い基盤的研究は含める。 ・有査読論文に加えて、米国農務省・LocalHarvest・大学が公開している資料も含める。	地域支援型農業 (Community Supported Agriculture: CSA ※CSAでは、農作業への協力を要請したり、イベントや教育プログラムを用意し農業体験を行っている場合がある。しかし、そのような農業体験がない場合もある。)	食事摂取・健康状態	採択件数12件 [1-12] ・食事摂取11件 [1-11] CSAへの参加の結果として、農産物の消費量や種類が多くなるという報告 [2、6、8、11] があり、低所得世帯を対象とした研究でもより多くの種類の農産物の消費が報告されている [4、5]。また、食事摂取との関連 [3、5、9、11]、購買行動との関連 [4、7]、食事計画の変化 [1、4、7、8]、外食頻度の減少 [7、8]、不健康な食品の置換 [7]、が報告されている。 ・健康状態3件 [4、11、12] CSAへの参加による体重減少 [4]、CSAへのアクセスが良いとBMIが低いこと [12]、が報告されている。しかし、CSA参加者と対照群でBMIや健康状態に有意差がなかった報告もある [11]。	食事摂取 ヘルスプロモーション 地域支援型農業 家庭の食環境 食介入

番号	著者 (発行年)	研究方法 研究デザイン/検索月・ データベース・検索式・ 検索語など	採択基準	農林漁業体験 の内容	アウトカム指標 (利点、重要性 に関する調査 項目)	結果 利点、重要性に関する 調査結果 [文献番号]	キーワード
6	Victoria Egli, et al. (2016)	ナラティブレビュー/ データベース: MEDLINE、PubMed、 Scopus、PsycINFO. 検索語: community garden*, allotment*、 school garden*、 teaching garden*. 参考文献リストからの マニュアルサーチも実 施.	・査読のある論文 ・土壌汚染、植物の 健康、英語以外の言 語、の論文は除外 ・会議録、論説、レ ター、本、は除外 ・出版日による制限 なし	コミュニティ ガーデン(果 物、野菜、ハー ブを自家消費 用に栽培する 土地.アロットメ ントガーデン、 スクールガー デンを含む.)	栄養、身体活 動、健康など	採択論文12件 [1-12] 【栄養的に健康な環境】 ・健康的な体重: 野菜果物摂取3件 [1-3]、ソーシャルネットワーク1件 [4] ・身体活動: 自然への接触1件 [5]、定期的な移動1件 [6] ・食料安全保障: 経済的利益2件 [3、7]、サプライチェーンの短縮1件 [7] 【社会的に健康な環境】 ・所有権と誇り: 犯罪の減少1件 [8]、ストレスの軽減1件 [8] ・都市の美化: 市民の関与1件 [9]、政治活動1件 [3] ・コミュニティの凝集性: 文化的アイデンティティ2件 [10、11]、目標と経験の共有 1件 [12].	知識の翻 訳 コミュニティ ガーデン ウェルビー イング ヘルスプロ モーション
7	Katherine Alaimo、 et al. (2016)	ナラティブレビュー/記 載なし	明確な記載なし(コ ミュニティガーデンへ の参加と健康との関 連やそのプロセスへ の示唆がえられる論 文)	コミュニティ ガーデン(コ ミュニティ ガーデンの健 康への利益を 補足するため に引用した文 献としてコミュ ニティガーデン 以外のガーデ ニングも含ま れる)	健康、健康行 動	・健康行動 食事: 野菜果物摂取の増加[1-5]、野菜果物の嗜好の改善[6、7]、を報告.自身で 採った作物を食べるようになり[8]、お菓子を野菜に置き変えるようになった[9]. 身体活動: 身体活動量や活動的な者の増加を報告[1、10-12].様々な作業があ り、高齢者へのテラーメイドな対応ができる活動である[13]. ・健康 社会参加、景観、集合効力感を介した主観的健康観への影響を報告[14]. 隣人やきょうだいと比べてBMIが低いことを報告[15]. HbA1c値の改善を報告[16]. 精神的健康: ストレスホルモン値の低下[17]、社会参加や地域とのつながり[18]、 自然とのふれあいやリラックス[9、19、20]、を報告.	ガーデニン グ コミュニティ ガーデン 健康 食事 身体活動 近隣

番号	著者 (発行年)	研究方法 研究デザイン/検索月・ データベース・検索式・ 検索語など	採択基準	農林漁業体験 の内容	アウトカム指標 (利点、重要性 に関する調査 項目)	結果 利点、重要性に関する 調査結果 [文献番号]	キーワード
8	Heather Ohly, et al. (2016)	システマティックレ ビュー/検索月:2014年 2月~2015年5月. データベース: MEDLINE、EMBASE、 PsycINFO、HMC、 SPP、 AEI、BEI、ASSIA、BNI 1994-current、ERIC、 AMED、CINAHL、 OpenGrey、ETHOS、 British Library Catalogue. データベース検索の他 に、レビュー文献や採 択文献の引用文献を精 査.採択した論文のうち 重要な3件を用いてWeb of Scienceにて引用文 献の検索. 検索方法:本文と Table1に公開.	対象:学童、学校職 員、家族およびコミュ ニティのメンバー(年 齢不問). OECD諸国 で実施.(英語の報 告) 介入:学校での園芸 活動への参加(特別 学校を含む18歳まで のすべての教育施設 を含む.あらゆる種類 の植物の栽培を含む. 学校外の活動は 除外). 対照:学校での園芸 活動へ参加していない 者、または他の活 動を行っている者.質 的研究には、この基 準は当てはまらない. 結果:健康やウェル ビーイングをアウトカム としている(食事摂 取、食知識、食態 度、食嗜好、身体的・ 精神的健康、クオリ ティオブライフを含 む)	スクールガー デン(特別学 校を含む18歳 までのすべて の教育施設を 含む.あらゆる 種類の植物の 栽培を含む.学 校外の活動は 除外.ガーデ ニングのみの介 入だけでなく、 調理や栄養教 育などを組み 合わせた介入 も含む.)	健康・ウェル ビーイング(食事 摂取、食知識、 食態度、食嗜 好、身体的・精 神的健康、ク オリティオブ ライフを含む)	採択文献40件 [1-40];34件の介入(国:イギリス[1、2、4、16、32、36、38]、ポルト ガル[10]、アメリカ [3、5、7-9、11、14、15、17-31、34、37]、オーストラリア [6、12、 13、33、35、39、40].研究デザイン:ランダム化比較試験5件 [1、2、9-11]、非ランダ ム化比較試験13件 [6-8、12-27]、質的研究など19件 [3-5、12-14、28-40] ※[12- 14] は混合研究法.学校種:保育園pre-schools [9、19、37]、小学校primary schools 1、2、4、6、12-14、18、31-33、35、36、38-40]、小学校elementary schools [5、7、8、11、15-17、19、20、23-25、27、29、34]、小学校upper elementary schools [21、22]、中学校middle schools [26、28、34]、中学校junior high schools [8]、高校 high schools [3、30、34]、高校secondary schools [4、32、40].研究の質の評価:量 的研究(EPHPPを使用) moderate6件 [2、6、11、16、17、18]、他はweak;質的研 究:Wallace、ら(2004)の基準を使用)strong5件 [3、12-14、31]、他はmoderateま たはweak. 【量的研究】 ・野菜果物摂取 13件 [1、2、6、7、9、14-16、18、19、24-26] の報告のうち、統計的に有意な増加 がみられたのは2件 [7、26] . ・栄養摂取 6件 [1、2、7、10、14、16] の報告のうち、4件 [1、2、7、16] で統計的に有意な変 化を報告. ・食嗜好 13件 [6、13、14、17-26] の報告のうち、8件 [6、18、20-22、24-26] で野菜果物 への好意の増加を報告. ・食知識、食態度 10件[2、18-26] の報告のうち、7件 [2、18、21、22、24-26] で統計的に有意な介 入効果を報告. ・身体的健康と身体活動	学校 ガーデン システマ ティックレ ビュー 健康 ウェルビー ング 混合研究 法

番号	著者 (発行年)	研究方法 研究デザイン/検索月・ データベース・検索式・ 検索語など	採択基準	農林漁業体験 の内容	アウトカム指標 (利点、重要性 に関する調査 項目)	結果 利点、重要性に関する 調査結果 [文献番号]	キーワード
						腹囲・BMI・血圧について報告している2件 [10、16] 件のうち、1件 [16] で拡張期血圧が有意に低いことを報告。他の指標で統計的に有意な変化はない。身体活動についての報告は1件 [11] あり、加速度計で測定した中等度の身体活動量が統計的に有意に増加した。軽い身体活動量は増えなかった。座位行動は主観的には減っていたが、加速度計で測定した場合には有意な変化がなかった。 ・ウェルビーイング 4件 [8、12、18、27] の報告のうち、2件 [12、18] では統計的に有意な改善が見られず、残りの2件 [8、27] では、十分な結果の報告がされていなかった。 【質的研究】 ・健康への影響 11件 [5、13、28、32、33、35-40] で子供の栄養面の利益(食知識、食意識、食態度の向上)を報告。5件 [5、28、38-40] で子供や大人の身体活動の機会となることを報告。 ・ウェルビーイングへの影響 14件 [3-5、13、28、29、32、33、35-40] で子供や大人のウェルビーイングへの影響を報告。 ※その他、質的研究の中では、スクールガーデンの教育効果 [3-5、13、28-30、32、33、35-39]、またはスクールガーデンの成功や持続可能性 [4、5、13、28、29、32-40] についても報告されているものがあつた。	

番号	著者 (発行年)	研究方法 研究デザイン/検索月・ データベース・検索式・ 検索語など	採択基準	農林漁業体験 の内容	アウトカム指標 (利点、重要性 に関する調査 項目)	結果 利点、重要性に関する 調査結果 [文献番号]	キーワード
9	Claire K. Berezowitz, et al. (2015)	ナラティブレビュー/検索月: 2013年5月. データベース: CABI、Web of Science、Web of Knowledge、PubMed、Education Full Text、ERIC、PsychINFO. 検索語: schools、academic performance/achievement、school performance、standardized test scores、cognitive function、nutrition education/intervention /programs、schools、farm to school、school gardens、nutrition/dietary intervention	・スクールガーデンによる介入研究(登校日に一か月以上行われたもの) ・K-12グレード(年長～高等学校)が対象 ・学業成績または食事の指標が含まれる ・学校での介入 ・西洋諸国の研究 ・英語の論文 ・査読有	スクールガーデン(一か月以上の介入)	食事に関する指標	採択論文11件 [1-11] ・野菜果物摂取の予測因子 栄養/食知識 [3-7]、野菜果物を食べる意欲 [2、3、7、8]、野菜果物への態度 [5、7、9]、食事や軽食での野菜果物の好みや選択 [1-3、5-7、10]、の統計的に有意な改善が示された。 ・野菜果物摂取 2つの研究では変化がなく [7、9]、3つの研究では増加を示した [2、10、11]。他の2つの研究では野菜摂取量のみを評価し、いずれも増加を示した [3、6]。	栄養と食事 カリキュラム 青少年の健康 学校保健
10	Jaimie N Davis, et al. (2015)	ナラティブレビュー/データベース: Medline、Embase	・英語の論文 ・学校で行われた介入 ・スクールガーデンの要素を含む ・介入前後の食事の指標が測定されている(食事摂取/食行動の決定要因)	スクールガーデン	食事の指標 (食事摂取/食行動の決定要因)	採択論文13件 [1-14] ※[1]と[14]は同じ介入。研究デザイン: 前向き研究1件[2]、前後比較デザイン3件[3-5]、非ランダム化試験9件[1、6-14]。国: オーストラリア3件[7、8、12]、アメリカ10件[1-6、9-11、13、14]。介入期間: 10週間～2年。対照学年: 幼稚園～中学生。 ・食行動 10件の介入のうち6件は食行動(野菜摂取など)に変化があり、4件では変化が見られなかった。 ・食行動の決定要因 嗜好: 8件の研究のうち7件では、野菜に対する嗜好が増加した。 態度: 4件すべてで野菜果物に対する態度が改善。 意欲と識別: 3件すべてで野菜果物を食べる意欲や識別が改善。 自己効力感: 3件すべてで野菜果物の調理や栽培の自己効力感が改善。 ・効果的な介入方法 農作物の栽培・収穫の実地体験、調理要素、ガーデニング講師の提供、計画と実施におけるステークホルダーの関与、親の関与、食品の提供、メディア・プロモーション、が少なくとも3つの研究で共通してあげられた。	学校菜園 持続可能性 果物摂取 野菜摂取

番号	著者 (発行年)	研究方法 研究デザイン/検索月・ データベース・検索式・ 検索語など	採択基準	農林漁業体験 の内容	アウトカム指標 (利点、重要性 に関する調査 項目)	結果 利点、重要性に関する 調査結果 [文献番号]	キーワード
11	Chris Genter, et al. (2015)	システマティックレビュー/検索月:2011年6~11月、2015年2月. データベース:AMED、ASSIA、CINAHL、PsycINFO、MEDLINE、SocINDEX、Web of Science. その他、関連するサイトの検索や通常のインターネット検索、専門誌のハンドサーチを実施. 検索方法は本文とTable 1で公開.	・1998~2015年に出版 ・量的研究もしくは質的研究 ・アロットメントガーデンに参加している ・健康またはウェルビーイングへの影響を報告している ・18歳以上を対象としている ・コミュニティガーデンは除外 ・英語の論文	アロットメントガーデン(小画面での自家消費の野菜果物の栽培)	健康・ウェルビーイング	採択論文10件[1-10]、量的研究3件[4、9、10]、質的研究7件[1-3、5-8]、国:フィンランド1件[7]、オランダ2件[9、10]、イギリス7件[1-6、8] ※[2、7、8]は精神的問題を抱える集団が対象 ・ソーシャルネットワーク 思い、技術、作物、時間の共有により社会的つながりが促され、参加者は包摂や支え合いを感じる[1-3、6-8、10].また、役割やポジティブな社会的アイデンティティを与えた[5]. ・ストレス低減 リラクセスストレスの低下に貢献する[2、3、5-7、9、10]. ・健康的なライフスタイル 新鮮な空気に触れ、新鮮な野菜にアクセスでき、価値のある仕事を行うことで、ウェルビーイングや身体的・精神的健康に寄与する[1、3、7-10]. ・自然との接触 自然と触れ合う機会を与え環境対応を促す[2、3、6、7、9、10]. ・個人の成長 個人の成長や技術の向上を促す[2、3、5、7、8].	アロットメントガーデン 健康とウェルビーイング システマティックレビュー
12	Gail A. Langelott o, et al. (2012)	メタアナリシス/データベース:Google Scholar、PubMed、American Society of Horticultural Science archives. 採択論文やレビュー論文のマニュアルサーチも実施. 検索語:intervention、fruit、vegetable、garden、nutrition、consumption、school、youth	・介入研究 ・幼稚園~中学生を対象 ・アメリカで実施 ・査読有	ガーデニングによる介入(コントロール、栄養教育、ガーデニング、の3群に分類)	栄養の知識、野菜果物の好み、野菜果物摂取(野菜果物の合計、野菜単独、果物単独、それぞれの報告がある場合はそれぞれで分析)	採択件数20件[1-20]、対象群無し6件[5、6、7、8、16、20]. ・Vote counting 前後比較の結果、ガーデニング群が最も多く有意な結果を示した(8/9件).栄養の知識、野菜の嗜好、果物摂取、野菜摂取、果物野菜摂取の増加が報告されている.栄養教育群で有意な増加が見られたのは1/10件のみ.コントロール群では0/12件. コントロール群と比較した結果、栄養教育群で7/17件、ガーデニング群で8/10件で観測された変数が有意に高かった. ・メタアナリシス:9件[1、3、5、8、9、12、13、17、19]を利用 栄養の知識:コントロール群と栄養教育群で有意に向上したが、ガーデニング群では有意な向上が認められなかった. 野菜果物の嗜好:ガーデニング群で野菜の嗜好が有意に向上した.果物では有意な影響はなかった.コントロール群では野菜と果物のいずれも有意な変化がなかった.栄養教育群は分析するのに十分なデータがなかった. 果物摂取:ガーデニング群でわずかながら有意に増加.栄養教育群ではわずかに減少.コントロール群では変化なし. 野菜摂取:ガーデニングで有意に増加.栄養教育群とコントロール群では変化なし.	小学校 中学校 子供の肥満予防 SNAP-Ed 学校菜園 票集計 文献レビュー

番号	著者 (発行年)	研究方法 研究デザイン/検索月・ データベース・検索式・ 検索語など	採択基準	農林漁業体験 の内容	アウトカム指標 (利点、重要性 に関する調査 項目)	結果 利点、重要性に関する 調査結果 [文献番号]	キーワード
13	Lacey Arneson Mccormack, et al. (2010)	ナラティブレビュー/ データベース: PubMed, Agricola. 検索語: farmers' market, community garden, nutrition, obesity, intervention, dietary intake. 参考文献からのマニ アルサーチも実施.	・青少年を対象とした 研究は除外 ・査読有 ・1980年～2009年1 月に出版	コミュニティー ガーデン	栄養関連の指 標	採択件数4件[1、2、3、4] ・コミュニティーガーデンの影響 コミュニティーガーデン参加者は、非参加者と比べて野菜[1、3]、野菜果物[2]を 多く摂取していた。バランスの良い食事の頻度も高かった[1]。また、半数以上の者は 参加前と比べて野菜果物をより食べるようになった[4].	
14	Ramana Robinson -o' Brien, et al. (2009)	ナラティブレビュー/ データベース: PubMed, Agricola, ERIC, PsychINFO. 検索語: youth, children, school gardens, community gardens, nutrition education, dietary behaviors.	・青少年の野菜果物 の摂取、野菜果物を 食べる意欲、野菜果 物の好み、その他の 栄養関連の結果へ の、ガーデンを拠点 とした栄養教育の影 響を調べた論文 ・米国の青少年を対 象としたもの ・査読有 ・英語で発表 ・1990年～2007年6 月に出版	ガーデンを拠 点とした栄養 教育	野菜果物の摂 取、野菜果物 を食べる意 欲、野菜果物 の好み、その 他の栄養関連 の結果	採択件数11件[1-11]、学校内5件 [1-5]、放課後プログラム3件 [6-8]、コミュニティ 内3件 [9-11]。年齢: 5歳から15歳。研究デザイン: 対照のある介入研究5件 [1-3、6、 8]、前後比較研究5件 [4、5、7、9、11]、フォーカスグループ1件 [10]. ・野菜果物摂取 4件の報告のうち3件[14、20、22]で、野菜果物もしくは野菜摂取の増加を報告(う ち[22]は男子のみ増加)。1件[17]では野菜果物摂取の改善はなかった。 ・野菜果物の好み 6件の報告のうち2件[15、17]で野菜の好みの改善を報告。一方で4件 [17、19、 21、24]で果物、4件[16、19、21、24]で野菜の好みの改善は見られなかった。 ・野菜果物を食べる意欲 3件の報告のうち、幼児または小学1年生を対象とした研究で野菜果物または野 菜を食べる意欲の改善が見られた[16、18]。小学4年生を対象とした1件[15]では改 善が見られなかった。 ・その他 4件 [15、16、18、24]で栄養知識の改善が報告されているが、2件[19、21]では改 善が見られなかった。 2件[19、21]で野菜果物摂取の自己効力感が指標とされている。1件[21]では自己 効力感の増加は見られず、もう一件[19]では増加はしたものの有意ではなかった。 ビタミンA・ビタミンC・食物繊維摂取量の増加[14]、料理頻度の増加[23]、他者や 文化への感謝の増加[23]、が報告された。	